



# 丸亀城の石垣と伝説

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**再**び丸亀駅にもどり、今度は南口から丸亀街道をたどって金刀比羅宮へと向かう。駅前の一ケド街を抜けて、古街道らしく装った石畳の細道を南下すると、すぐに丸亀城の立派な石垣が見えてきた。

これは凄い。丸亀城は、亀山という標高六六六の小山を石垣で固めて築城されているので、文字通り山のように聳える日本一の高石垣だ。しかし、その石垣の上に鎮座する天守は、日本で一二カ所しかない現存天守の一つらしいが、まるで櫓のように小さくて巨大な石垣と不釣り合いだ。

上に登ればもっと大きい天守が立っているのかもしれない。それに三の丸の石垣は、約二二メートルという高さもさることながら、「扇の勾配」と呼ばれる曲線はたいそう見事であるらしい。せっかくだから本丸まで登ってみたい。

「これから金毘羅さんまで一二キロも歩くのに、あんな高いところを上るのかね」と、嫌がる同行者を説き伏せつつ、北門から城址公園に入ると、かなりの急坂が続いており、額に汗がにじむころ三の丸の石垣にたどりついた。

なるほど、徐々に勾配を急にしながら聳え立つ様は、たしかに美しい。しかし、私は大きいとか、高

いとか客観的な指標でしか物の価値を判断できないので、他城のそれと比べて、どれほどのものかよくわからない。まあ、もとより勾配の美しさよりも、実はこの石垣には面白い伝説が伝わっているので見てみたかったのだ。

この石垣を築いたのは、仲多度郡琴平町苗田の石工・羽坂重三郎だと伝説はいう。完成した石垣を見た藩主は、鳥でなければこの石垣を越えることは出来ないだろうと満足だった。しかし、ここで羽坂は余計なことを言ってしまう。「普通の者では無理ですが、私ならば一尺（約三〇センチ）の鉄棒があれば、容易に登ることが出来ます」。

「ほう、よう言うた。出来ねばお前の首を刎ねるぞ」「よろしゅうございませう」羽坂はうなずくと、一尺の鉄棒を石垣の隙間にこじ入れながら、登りきってしまった。「扇の勾配」だけに、天辺で扇をパツとひろげ、藩主を見下ろし「ご覧じ候」とやらかしたかもしれない。しかし、呵呵大笑する彼を、藩主は冷徹な眼差しで見上げていた。「こやつが敵と通じれば、城内に忍び込まれる恐れがある」。かくして得意げに降りてきた羽坂は、井戸の調査を命じられ、底に降りたところを生き埋めにされてしまった。

これは城の抜け道や石橋を造った大工や石工を、

秘密保持のために殺してしまうというパターンの伝説だが、お調子者を戒めるという寓話風にアレンジされていて完成度も高い。哀れな羽坂の墓は、南条町の寿覚院にあるというが、こちらは残念だが立ち寄ることは出来そうもない。伝説の主人公の墓を見たいので、二キロほど寄り道しようと言ったら、それこそ調子にのるなと同行者が爆発する恐れがあるからだ。（つづく）



丸亀城三の丸の石垣

[交通] JR丸亀駅から徒歩約10分